

第32回永井隆平和賞 中学生の部 優秀賞
私の平和宣言

沖縄県糸満市立高嶺中学校三年

濱元優愛

テレビの画面に、目を疑うような光景。ロシアの複数の軍用車両が、ウクライナのキエフ市内を攻撃していた。建物は破壊され、街中を逃げ迷う住民。人々は負傷し、バラバラになった家族。我が子を捜す母親の姿は、痛ましい。私はとつさに「戦争だ。惨すぎる。」その映像は以前、祖母から聞いたまるで沖縄戦のようだった。七十七年前の沖縄戦が一気に、蘇えった。この地球のどこかで、まだ戦争が起きている。私は強い衝撃を受けた。なぜ、人々は戦争という過ちを繰り返すのであろうか。

今から七十七年前、ここ沖縄はアメリカ軍が上陸し、沖縄県民を巻き込んだ地上戦が繰り広げられ戦場と化した。二十万人もの多くの命が奪われた。私の祖母も沖縄戦の体験者である。私の祖母は、沖縄戦終焉の地、糸満市の摩文仁で生まれ育った。沖縄戦当時、祖母が六歳、祖父が八歳。戦争が始まると、祖母は沖縄本島北部の山原と呼ばれる所へ、家族と避難した。逃げるために歩き続けた。弱音を吐くこともできず、泣きながら歩き続けた六歳の祖母。両足はむくみ、パンパンに膨れ上がった。ただただ生き延びることだけを考えて。アメリカ軍の攻撃から身を避けて、暗い山原の森を逃げ命を守り続けた祖母。戦争が長引き悪化し、激戦地となった摩文仁は、この世とは思えないほどの戦地。焼け野原。全てが焼失。暗黒。住民を含め、大勢の人が銃で撃たれ、死人があちこちに横たわっていた。人が人でなくなる、それが戦争。祖母は当時のことを目を閉じて、ゆっくりとそう話してくれた。今は亡き祖父。私は祖父から戦争の話聞いたことが一度もない。そこには祖父の壮絶な思いがあった。当時九歳だった祖父。姉と川へ水汲みに行き、目の前で姉の爆弾が投下された。祖父は川へ飛び込み無事だったが、姉の死を目のあたりにした祖父の気持ちは想像を絶する。祖父の思いは、ずっと閉ざされたままだった。そのことを私は、

祖母から聞いた。祖母は八十三歳になるが、戦争の記憶をはっきりと覚えている。「戦争は絶対にしてはいけない。命こそ宝、命どう宝。」と強く言う。

六月二十三日、慰霊の日、私は祈りを捧げる。祖母の家の仏壇の位牌には、戦争で亡くなった人の名前が刻まれている。私の先祖。毎年、慰霊の日や旧盆には、私は祖母の家にいき、仏壇に両手を合わせて祈る。平和であることを祈る。

沖縄戦を体験した人々が高齢化している今日、私は平和の尊さを戦争の悲惨さを正しく伝える担い手になりたいと強く思うようになった。私は、糸満市の平和ガイドとして活動している。沖縄戦を体験した祖父母の話を通して伝える。戦争の悲惨さ、平和の尊さ、生命の大切さ、命どう宝を広く大勢の人々に伝えたい。声を大にして、伝えていく使命が私にはあるのだ。

沖縄には、まだ戦争の爪痕が残っている。ここ糸満市は沖縄の激戦地で、多くの御霊が眠っている。そのため、現在も遺骨採集が行われている。そのような中、沖縄本島北部の名護市辺野古の埋め立て地に、糸満を含め南部の土砂を使用することが話題になっている。遺族の心情を察すると私は、憤りを感じずにはいられない。

梅雨が明け、強い太陽の日差しと青空が広がる沖縄。糸満市摩文仁近くの喜屋武では、青空の中、大輪のひまわりの花畑が広がっている。奇しくもひまわりの花は、ウクライナの国花だという。ここ糸満から平和を願い、平和を発信する。ウクライナに一日も早く平和が訪れますように。平和の尊さ、命こそ宝、命どう宝。あの太平洋戦争は何だったのか、沖縄戦はどんな意義があったのか、戦争という同じ過ちを二度と繰り返さないために、私は今、ここに平和を宣誓する。

秦由加子講演会

「人生を変えたパラリンピック」を聞いて

私が由加子さんの話を聞いて一番心に残ったことは「障害を持つことは特別なことではない」という言葉です。私は今まで人間が体に障害をおう事がどんなに大変でつらいこと

なにかわかりませんでした。しかし、障害を持つている方を見の前になると、改めて障害というものを実感しました。人間は一人一人コンプレックスがあります。そのコンプレックスをどのように考えるかで人生は変わるの、考え方は一つじゃないことを頭に入れて過ごしていきたいです。

一年一組 上原しえら

しょう害は特別じゃないというのと、誰にでも起こりうるというのをまた考え直してみたいです。これから自分にも起こるかもしれないので起こってしまったらマイナスに考えないようにしたいです。

一年二組 下地琉虎

僕は、今回の話を聞いてしょうがい者に対する思いが変わりました。今まではしょうがい者がみんな辛い思いをしていると思ったけどみんな強い思いを持っているんだなと思いました。

二年一組 城間徠志

障害を持つことは人と違って、はずかしい事だと思っていました。でも、由加子さんの話を聞いて、障害を持つことは、はずかしいことじゃないし、自分に自信を持つ機会でもあるんだと思いました。もし自分がかた足を失ったら、周りの目を気にしてしまうかもしれない。でも、マイナスだけじゃないので、義足になっても自分を受け入れられるようになりたいです。

二年二組 中村苺

10月3日、パラリンピックのトライアスロン選手、秦由加子選手の講演がありました。

私は、講演を聞いて、もし自分に足がなかったら、ということを考えてみました。私はまず、ぎそくにスポンジをかぶせ、あたかも普通の足であるかのように思います。そして、なぜわたしだけこうなんだろうと思いつたよ、過ぎすと思えます。でも、秦選手が言ったように、自分に人ところがあってもはづかしがらずに、自分自身には何ができるのかを考え、自分の好きなことを生かせればい

いなと思えました。

今回の講演で、私が今までに思っていた足の人たちのイメージが変わりました。それは、足がないから、手がないから、目が見えないから、とあきらめるのではなく、「私たちにしかできないことをやる」と前向きな気持ちでいることです。そして、そのことを知った私自身もこれからの人生で大変なことがあっても、前向きな気持ちで乗りこえていきたいです。

三年一組 山城美希

講演を聞いて「人生は自分次第で変わる」という言葉が心に残りました。足の切断となつたとき、恥ずかしがるのか、前を向き続けるのかは自分次第です。でも、由加子さんは自分なりに努力し、どんな状況になっても好きなことをやり続けたからこそ、パラリンピックという舞台に立てたのだと思いました。私も、辛いことがあっても由加子さんのように乗り越えたいです。

三年二組 古波津未音

秦由加子選手へのお礼

高嶺中学校に講演会をしに来てくれてありがとうございます。僕は秦選手の話で一番印象に残っているのが「目が悪い人がメガネをしていて足がなくて目が悪い人がメガネ」とは同じ事だから何も特別なことじゃない」という所です。自分が足を亡くした時、今メガネをかけているものと同じように義足をつけることができるのか、これから心に止めて考えたいと思いました。

三年二組 兼元紫優哉

今日は、お忙しい中私たちにいろいろなお話を教えてくれてありがとうございます。私をも少し足がなくなってしまうたら、心が折れてしまうと思います。秦由加子さんはあきらめず、目標に向かって進んでいくところがとてもかっこいいと思えました。私も秦由加子さんのように目標に向かって進んでいきたいです。

一年一組 新垣祐日